

神戸博太郎教授のプロフィール

— 第10回メトラ賞受賞者 —



神戸博太郎教授は、1920年5月13日、銀行家の長男として東京に生まれた。神戸教授は、幼少の頃ニューヨークの幼稚園に通ったことをよく憶えており、日本語より英語を先に習い覚えたという経験を自慢にしている。中学、高校の過程を東京で終え、1943年東京大学理学部化学科を卒業した。2年間の海軍技術将校としての軍務の後、大学に戻り、大学院に進んだ。

1946年、神戸教授は東京大学理工学研究所（かつての航空研究所）の研究員となった。第二次大戦後日本では航空学の研究が禁止されて研究所の組織が変わり、神戸教授は航空に特別の関心をもたずにこの研究所に入所した。しかし、サンフランシスコでの平和条約の締結に伴ない、研究所は1958年に元の名称に戻り、1964年には、宇宙航空研究所と名称を更新した。この変革を通して神戸教授は材料部で研究を進め、1952年に講師、1956年に助教授、1967年に教授に昇進した。

神戸教授の科学的関心は物理化学の分野で広範囲にわたる。まず、金属石鹸の物理化学的性質の研究にはじまり、この業績で、1967年東京大学から理学博士を与えられた。この研究でレオロジーに強い関心を持ちはじめ、その結果、日本でレオロジーの科学をはじめて利用した一人になり、各種の材料へのレオロジーの応用に関する総説を多数著わした。1972年には日本レオロジー学会を組織し、現在、その副会長である。石鹸の研究は、また一方で、有機系へDTAを応用するという方向へも動く。

1960年代の初期、研究所が再び宇宙航空の分野での活動を始めた時、神戸教授の関心は高分子の耐熱性に向かい、それと共に、ポリマーの研究に種々の熱分析的手法を応用する先駆者にもなり、既に1960年に、DTAのポリマー分野への応用についての総説を書いている。

1963年のWorcesterでの第2回ICTAにおいて、神戸教授は、須藤教授の代りに理事に任命され、同時に標準化委員会に加わって1974年まで活発な委員であった。事実、委員会の会合に欠かさず出席し、そのため、神戸教授は委員会でおそらくもっとも広く旅行した委員であろう。1971年にはICTAの副会長に選出され、ついで1974年から77年まで活動的な会長であった。

神戸教授は、1974年に、Akron大学のGarn教授と共同で、熱分析に関する日米セミナーを組織し、“Thermal Analysis: Comparative Studies on Materials”を編集した。また、1975年には、熱分析に関する日本語で最初の単行本を編集している。

神戸教授は大の旅行愛好者であり、欠かさずに雄子夫人を同伴している。また、優れた写真家であって、その書棚には、教授と雄子夫人を、数多き外国訪問の楽しい思い出にいざなう写真帖が山と積み上げられている。新ICTA会長であるDr. McAdieは、神戸教授を“遺孀会長”とって紹介している。

(原文はNATASのProceedingに無署名で書かれた神戸教授の紹介記事である。外国での人物紹介もICTA会長であった神戸教授にふさわしいと思い、そのまま和訳して掲載した。訳者：三田 達)

ポール・ドナルド・ガーン教授の横顔

— 第1回ICTAデュボン賞受賞者 —

今夏京都で開かれた第5回ICTAの折、米国オハイオ州アクロンのアクロン大学化学科のポール・D・ガーン教授に、今回よりICTAに対してデュボン社から提供されることになった、デュボン賞が授けられた。ガーン教授は永年にわたり私の友人であり、この栄誉を受けられたことは、私にとっても大きな喜びであった。同教授は1970年第6回熱測定討論会の折にも来日されたことがあるが、私との付き合いがもっとも親しいので、その経歴と業績の一端をご紹



介しよう。

ガン教授は1920年7月7日 オハイオ州フレモントの生まれで、くしくも私と同年である。第2次大戦中、陸軍通信隊の大尉として勤務し、復員後オハイオ州立大学に入り、1952年 Ph.D. をえた。その後ベル電話研究所に勤めたことがあるが、1963年にアクロン大学の化学科の教授に迎えられ現在に至っている。彼は結成直後に、北米熱分析連合(NATAS)の会長を勤め、ICTAでは1965年以来標準化委員会の副委員長であったが、1974年に委員長になった。J. Thermal Analysisの編集顧問でもある。ベル時代から熱分析の研究者であり、70数篇の論文がある。しかしもっとも有名なのは、1965年 Academic Press社より発行された Thermoanalytical Methods of Investigation という著書である。また1974年には私と協力して、アクロン市で第一回熱分析日米セミナーを開いた。このときの記録は Thermal Analysis: Comparative Studies on Materials として出版されている。

彼の熱分析の研究は1948年修士の学位をえたときの、ハロゲン化ホウ素の研究のときから続いている。ベル時代には蓄電器の性能向上のための添加剤とアルキド樹脂の研究を行っているが、特に高い精度の実験を行なうために多くの装置の改良を試みた。その成果が彼の著書に結集したものと思われる。現在アクロン大学では、熱分析法の開発、熱分解反応機構、固相転移、熱量測定、液晶(スメクチック中間相)、ガスクロマトグラフィーなどを研究している。

デュボン賞の受賞講演は Kinetic parameters と題するものであるが、熱分析法により反応定数を求める際に考慮すべき因子を検討し、しばしば同一の反応の反応定数の値が測定者によってかなりの差を示す原因を探るものであった。前回来日したときの講演もそうであったが、彼の話は非常に理論的・抽象的であり、難解であるが、すぐれた解析力と直線的に本質に迫っていく力は、まことに彼の面目躍如たるものであった。

ポールは、1977年8月26日に、永年つれ添った妻のポリリーを失った。彼の論文や手紙はすべてポリリーがタイプした。彼はいつでも派手な色彩のネクタイをしているが、これはポリリーが自分で作ってくれたのである。成人した3人の子供がいるが、今はアクロンの近くのケントという町の古い家に次男と2人で住んでいる。(神戸博太郎)